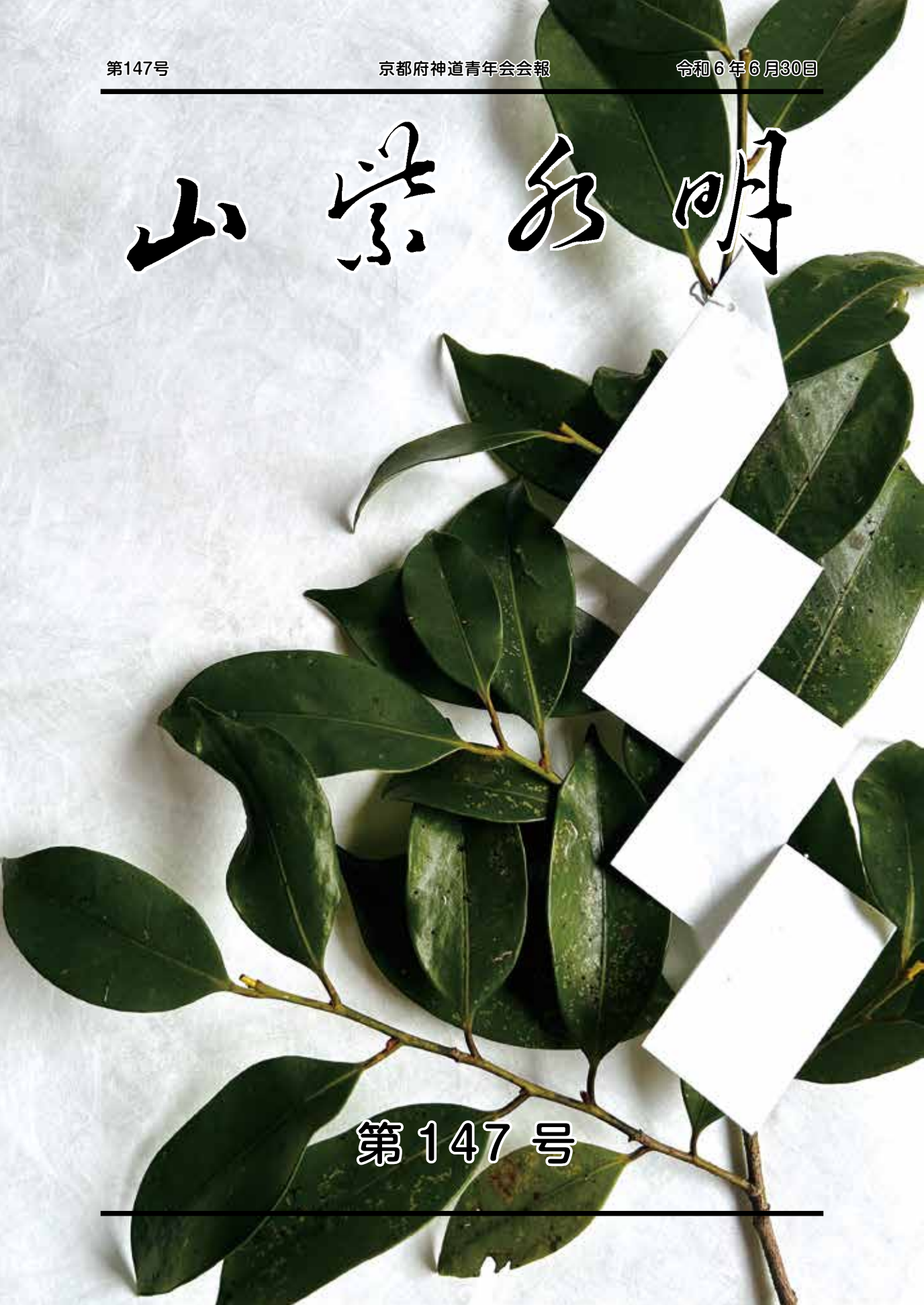
第147号　京都府神道青年会会報　令和６年６月30日

山紫水明



第147号

第一四七号　目次

表　紙　1
会長挨拶　3
新年会　4
沖縄京都の塔慰霊参拝研修会報告　5
各委員会報告　6
近畿・中央報告　12
編集後記　24

ご挨拶

会長　進藤 大長

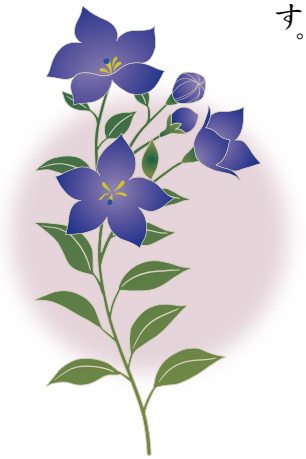
今上陛下御即位五年の佳節を迎えるにあたり、先ず以て御皇室の弥栄と益々のご繁栄を祈念申し上げます。

神宮におかれましては第六十三回神宮式年遷宮を見据え、準備が進められますこと、諸祭恙無く斎行されておられますこと誠に慶賀に存じ上げます。当会と致しましても、平時における参宮促進運動に取り組んで参る所存でございます。

本年一月一日に能登半島を襲った地震と津波により甚大な被害がもたらされ多くの尊い人命が奪われましたことは痛恨の極みであり、被災された方々の心中如何ばかりかと拝察いたすところであると共に、一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

政府や諸団体を中心に支援・復興が着実に進められる中、元通りの暮らしに戻ることが困難な状況にある方々が今なお数多くおられます。またコミュニティの中心でもある被災神社では損壊など甚大な被害状況が続々と報告されていることに鑑み、神道青年全国協議会におかれましては速やかに全国の同志に物資の供給や義損金を募る伝達が行われるなど、既に支援活動が開始されております。当会に於いては、一月五日に微力ながら飲料水を被災地へ送らせていただきました。

そして支援活動の輪は単位会の垣根を越えて広がりつつある中、偉大なる諸先輩方が歩み築き上げてこられた揺るぎない奉仕の精神を繋ぎ全うしていくことが今我々個々に求められていることと再認識している次第です。奇しくも近畿地区連絡協議会設立三十周年の節目を迎えるに際し、諸先輩方から受け継がれたものがひとつの「まつり」のかたちとして実ろうとしています。一人でも多くの会員諸兄がより青年神職らしく研鑽を重ねていただけますよう準備を進めて参りますので、継続事業と併せまして引き続きご支援とご協力の程宜しくお願い申し上げます。



新年会

二月八日(木)平安神宮会館に於いて、約七十名参加のもと新年会が開催されました。

開会に先んじて本年一月一日に石川県能登地方で発生した地震と津波により被災し亡くなられた方々へ黙祷が捧げられました。生嶌副会長による開会の辞、続いて進藤会長より挨拶がなされました。その中で「人前で話すことの大切さ」を自身の職責を通しての所感として述べられたほか、当面の事業計画や進捗状況、継続してご支援とご協力をお願いする旨がお話しされました。ご来賓を代表され京都府神社庁 副庁長林秀俊様よりご祝辞を、続いて乾杯のご発声を京都府氏子青年連合会会長 上野文男様より賜り、ささやかな祝宴がはじまりました。

歓談のなか、恒例の親睦委員会による余興「ビンゴ大会」が催され、数字が発表されるごとに歓声があがり、入選者には景品が手渡されるなど終始和やかな雰囲気の中、盛会のうち東條副会長の挨拶を以て閉会となりました。

最後にご来賓として京都府神社庁をはじめ京都府氏子青年連合会、各協賛企業様方、ＯＢ先輩方、本年も多数の皆様にご列席いただき励ましのお言葉を賜りましたこと、この場をお借りして心より厚くお礼申し上げます。

（北野天満宮　岸本　隆美）

沖縄・京都の塔慰霊参拝団研修旅行

去る令和五年十二月十二日及び十三日の二日間、神道政治連盟京都本部主催、沖縄・京都の塔慰霊参拝団研修旅行が行われました。

今回は例年のスケジュールとは異なり、行程一日目は二手に分かれ、私は国際通りの散策を堪能した後、首里城公園へ向かいました。途中バスガイドさんの案内にて、那覇市立壺屋焼物初物館に立ち寄り、焼物の歴史や時代によって変化してした焼物の文化を学びました。そして沖縄の象徴だけでなく、世界遺産でもある首里城は現在再建に向けて工事が進められており、内部では焼け残った大龍柱の展示や、建物の復元作業が進められている貴重な様子を見学する事が出来ました。

行程二日目には波上宮を正式参拝。波上宮を御案内いただいた後、当時激戦地であった場所に建てられた京都の塔（宣野湾市嘉数高台公園内）へ向かいました。

当日は天候に恵まれ、二、五三六柱の御霊が祀られている京都の塔の前にて、まず後藤重和斎主が祭詞を奏上。次に女子神職会の二名が白百合を手に「常永遠の舞」を奉納し、厳粛に斎行されました。

その後、参列者全員で「海ゆかば」を合唱し、歌詞に込められた想いで目頭が熱くなったのを覚えております。

今回の研修旅行に参加し、現代まで語り継がれている当時の戦果の状況を風化させない事、また私達が日々平和に過ごす事が出来ているありがたさを改めて感じました。

最後になりましたが、京都の塔での慰霊祭の諸準備をしていただいていた波上宮の皆様、このような機会を下さった皆様方に感謝を申し上げます。

（御嶽教末廣教会　北川 真喜子）

委員会報告

組織委員会

機関紙『洛声』第一四〇号発行

当会組織委員会では会員の近況を報告する機関紙『洛声』第一四〇号を発行いたしました。

本号では、雑誌風の見出し等を参考に、会員の皆様がより身近に感じていただけるようなものにしたいと委員内で協力し作製いたしました。

本紙を通じて会員同士の情報共有、また親睦や連携を図りながら組織力をより強固なものにしていきたいと考えております。

これからも、会員皆様の近況を掲載していきたく思いますので、引き続き情報収集のご協力をお願い申し上げます。

（松尾大社　進藤　恵太郎）

教化委員会

七五三の集い

教化委員会では令和五年十一月二十七日御香宮神社に於いて「七五三の集い」を開催しました。この催しは、青少年教化育成事業の一環として普段児童養護施設で生活している子どもたちに我が国固有の人生儀礼を知っていただくと共に、レクリエーション体験などを通して楽しい思い出をつくってもらいたいという想いで、施設や親御さんのご理解とご協力を得て取り組んでいるものです。

午後一時半頃、境内に市内の四施設より十五名の子どもたちが集まると廣教化委員長より開会のご挨拶が述べられ、先ず工作体験として「大麻づくり」が始まりました。作り方の説明を受けた子供たちは思い思いに用意された紙垂を折り合わせ、木の角棒に結び付けていきます。少し緊張が解れた様子の子供たちは、次に拝殿へ移動し御祈祷を受け手を合わせ祈りを捧げます。無事滞りなく斎行された後、田中博志ＯＢ先輩によるジャグリングショーがはじまり、ショーを目にした子供たちからは

歓声があがり満面の笑みを見せてくれました。

今回、御祈祷に際し、修祓で用いる大麻の所作を助勢会員の皆さんと子どもたちに手解きし、子供たち自らが作った大麻を左右左と振って自らを祓う体験をしてもらえたことが印象的でした。参加した子供たちにも少しでも良い思い出として記憶の片隅に留めてもらえたらと願うばかりです。

（御香宮神社　金丸　敬平）

事業委員会

令和六年カレンダー発送作業

事業委員会では、令和五年十一月八日、八坂神社常磐新殿に於いて、令和六年カレンダーの発送作業を執り行いました。

当会のカレンダー事業は、府内各神社の祭典日を掲載するなど文化慣習の再認識、延いては神道教化の観点から敬神の念、我が国独自の国民性を再認識する一助でありたいと考え、年毎に日本の伝統文化に基づいたテーマを設定し作製させていただいているものです。

今回のテーマは「雅楽」といたしました。雅楽は千年以上の歴史を有し、日本古来の儀式音楽や舞踊などと、大陸や朝鮮から渡来した音楽や舞が融合し、平安時代に日本独自の様式に整えられていった音楽などをいい、

宮中や寺院、神社に於いて儀式などで盛んに演奏され今日に至っています。

「雅楽 うたまひ―千年続く悠久の調べ―」と題して描かれた柔らかく奥ゆかしい描画と共に多くの皆様にご高覧いただけますと幸いです。

最後になりますが、この度作画を快く引き受けてくださいました日本画家 諫山宝樹先生をはじめ、関係者の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

（八坂神社　福本　翔一郎）

渉外委員会

ヤチマタ募金活動報告

一月二十五日、北野天満宮境内に於いて進藤会長をはじめ役員、会員八名参加のもとヤチマタ募金活動を行いました。

昨年は感染症対策の為でもあったようですが、今回は当日朝から厳冬の気候となった為、活動時間を二時間に制限して行いました。冬空の下、限られた活動時間ではありましたが懸命にお声掛けをさせていただいた結果、参拝者の皆様から温かいお気持ちを戴き目標を超える金額を集めることができました。

（八坂神社　藤森　長尚）

二月三日夕刻、節分祭で賑わう吉田神社の境内の一角をお借りして恒例のヤチマタ募金活動が行われ、当会からは進藤会長をはじめ会員八名が参加いたしました。

京都府神社庁、氏子青年連合会の方々と共に参拝者の皆様へヤチマタ基金の概要などを説明しながらお声掛けをさせていただきました。

大変気温の低い中の募金活動であったにもかかわらず、皆様からの温かい募金をいただき、心温まる思いで活動をさせていただきました。皆様からの温かいお気持ちは京都府神社庁を通じて京都府に寄贈され、交通安全推進事業等に充てられます。

会員の皆様には是非とも本事業の趣旨をご理解いただきチャリティバザーや募金活動への参加をお願いいたします。

（貴船神社　櫻井　孝嘉）

組織委員会

親睦委員会

ＯＢ懇親会

去る十一月二十八日、組織・親睦委員会主催による「ＯＢ懇親会」が、ＯＢ会員十二名、会員三十名参加のもと、がんこ三条本店で開催された。

まず進藤会長が「コロナ禍で薄まった親睦を深めたい」と挨拶。続いて、倭文神社の後藤泰弘先輩が「コロナ禍で世界は一変した。ピンチをチャンスに変え、神青会員の若い力で世の中をお清めいただきたい。また、ご奉仕される大神様の一番の信者になって斯界の為に力を尽くしていただきたい」と乾杯の発声ののち開会した。

余興では、府内の「難読神社名クイズ」が催され、現役会員は顔をしかめながらも、諸先輩方にご教示いただきながら教養を深めた。

後半には、弓矢八幡の林丈嗣先輩が「私も若い頃から懇親の場に参加し沢山の仲間を得た。こうした機会を大切にしていただきたい」と挨拶され万歳三唱を行った。

最後に、生嶌副会長が「これからも当会は諸先輩方のご指導をいただきながら若い力で継続していく」と決意を新たにし閉会した。諸先輩方から様々なお話を伺う大変貴重な懇親会となった。

（北野天満宮　藤田　長英）

広報委員会

広報誌『山紫水明』一四六号発送作業

去る令和五年十二月二十一日、八坂神社常盤新殿の一角をお借りして当会広報誌『山紫水明』一四六号の封入作業が行われました。当日は社務を終えて駆けつけてくださった進藤会長をはじめ役員の皆様方、両副委員長、計七名にて送付先、部数等確認しながら分担し封入作業を進めました。連携の甲斐があってか、一時間半程度で滞りなく封入作業を終えると、発送については、多数の会員が在籍する市内各社のうち数ヶ所へ北川監事と生嶌副会長のお二方が持参をしていただき、残る郵送分は翌日、室川事務局長より無事発送した旨お知らせいただきました。

今回、委員長として初めて携わらせていただきましたが、会長をはじめ会員皆様のおかげさまで僅かながら〝一歩〟成果をあげられたのではないかと感じました。至らない点もあったかとは思いますが、また次の〝一歩〟を皆様と共に歩み出せますよう今後ともご理解とご協力の程宜しくお願いいたします。

（貴船神社　櫻井　孝嘉）

事業委員会　広報委員会　親睦委員会

三委員会合同研修会「有職故実と衣紋道」

去る四月十七日、賀茂別雷神社において当会事業・広報・親睦の三委員会による合同研修会が開催され、社務を終えた会員など三十七名が参加した。

山名親睦委員長司会進行のもと「有職故実と衣紋道」と題し、株式会社髙田装束店代表取締役 加藤充則先生を講師にお迎えしての開催となり、深瀬副会長から開会の辞が述べられた後、進藤会長より挨拶、続いて加藤先生の略歴が説明された。

ご講演では会場に準備された貴重な装束の端切れ等が並べられ、事前に配布された資料をもとにご説明がなされた。寛永年間創業の長い歴史の中で装束の調製や衣紋方としてご奉仕されてきた経緯も然ることながら神社内陣に於ける御神宝などの調度品も数多く調製されてきたこと、また現在の時代祭行列に於ける和宮様の衣装を調製した逸話など興味深いお話

を拝聴させていただいた。

次に私たちが普段手にする衣冠の着装実演に移ると、加藤先生が培われてきた経験を基に実務に即した方法で衣紋者として実演いただいた後、参加者は六、七名が一つの班になり、準備された装束の着装を交代しながら行った。参加した神職は皆、限られた時間の中で加藤先生のご指導を仰ぎながら熱心に取り組み、気がつけば講演終了予定の時刻を過ぎていたような状況であった。私自身は「御方」に徹していたが、他社の先輩が後輩に要領良くいくようご指導ならさっておられるのを見て「なるほどな」と気づきを得た場面もあった。

普段、実務に於いて衣紋者をする機会は年に数える程有るか無いかであろう。しかし、そのような機会とは私たち神職にとって最も重要な日であり、威儀を整え、最善を尽くさなければならない。その日のために備えておくことの大切さを改めて感じさせられた充実したひとときとなった。

此度、開催にあたり快く講師を引き受けてくださった加藤先生をはじめ関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。

（貴船神社　櫻井　孝嘉）

近畿地区報告

第二十九回全國戦歿學徒追悼祭

去る令和五年十月二十一日、淡路島若人の広場に於いて、戦歿學徒追悼慰霊祭が厳かに執り行われた。静寂が広がり、風が穏やかに吹き抜ける中、日本を守るために勇敢に戦い、犠牲となった學徒たちを偲ぶため関係者ら約二百名が集った。戦歿學徒慰霊祭は、異なる宗教が一つの共通の目的に向かって手を取り合い、心を寄せ合った感動的な瞬間であった。戦歿學徒たちへの感謝が交錯する場として、異なる信念が共鳴し合った素晴らしい出来事である。

まつりの中心には、神道、仏教、キリスト教の代表者たちが共に立ち、戦歿學徒たちへの祈りを大切にし、宗教の垣根を超えた協力と調和が広場に漂う。参加者たちは、異なる信仰を持ちながらも、共通の願いとして平和と戦歿學徒たちへの感謝を分かち合えたことに深く感動した。慰霊祭は、異なる宗教が共に歩むことで生まれ、調和と共感の象徴となったのである。

現代社会では、宗教や信仰の違いがしばしば分かちがたい壁となる。しかし、淡路島若人の広場で見られたように、異なる信仰が一つの目的に向かって共に歩むことは、平和と理解へこの慰霊祭の経験が、異なる宗教が手を組むことで生まれる深い願いを、今後の社会にも広がり、平和な共存の未来を築く一助となることを願ってやまない。

（大石神社　進藤　大長）

第二回連絡会並びに研修会

令和五年十二月四日、兵庫県神戸市の湊川神社・楠公会館において神道青年近畿地区連絡協議会第二回連絡会並びに研修会が開催され、当会より進藤大長会長をはじめ三名が参加した。

東京都台東区鎮座の下谷神社宮司阿部明徳様を講師にお迎えし『支援活動とボランティアを受け入れる側の心得～備えあれば憂いなし～』と題しご講演を賜った。

講演ではご自身が復興支援活動をされてきた阪神淡路大震災、東日本大震災での経験を映像資料等を用いてお話し頂き、今後災害が起こった際にどのように対応すればより良い復興支援活動が出来るのかをご講話頂いた。また、阿部宮司が御奉仕されている下谷神社は大正十二年の関東大震災において被災したが、同十五年には現在でも担がれている本社神輿が奉納された点をふまえ、復興支援活動の目標（目的）は祭礼の復興であり、再び斎行できるように少しずつでも周囲の環境を整えていく事が自身の復興支援活動の原点であるとお話しをされていた。阪神淡路大震災の復興支援活動時には、日野神社（西宮市鎮座）の総代から「復興に来る土方さん、どこか品が良い」と言われたとユーモアあるエピソードを紹介された。そこから、神職たるものはどのような状況においても節度を保ち、事にあたらなければいけないという事をご講話から再認識した。

研修会の後、第二回連絡会が開催され、北川真喜子近畿地区副会長の開会の辞に続き、国旗を通して神宮を遙拝、国歌斉唱、敬神生活の綱領唱和と続き野上浩司近畿地区会長、当番府県である澤田政彰兵庫県神道青年会会長がそれぞれ挨拶を述べた。次に来賓紹介（八名出席）の後、ご来賓を代表して兵庫県神社庁長垣田宗彦様、近畿地区顧問別所啓介様よりご祝辞を賜った。次に、当番府県会長である澤田政彰会長が議長に選出され議事が進められた。様々な近畿地区、また単位会に関する報告がなされた後、神道青年の歌、美はしき山河を斉唱し、西田周司近畿地区相談役による聖寿万歳、吉井良迪近畿地区副会長の閉会の辞をもって第二回連絡会は滞りなく納められた。引き続き、懇親会が同会館菊水の間にて行われ、久しぶりに再会する同志と懇親を深め盛況の内に散会となった。

（大将軍八神社　生嶌　紀之）

御堂筋パレード

令和六年一月二十七日、国旗制定記念日において、私たちは大阪の御堂筋で国旗の小旗を持ちながらアピール行進を行った。この行進は、各ご家庭に祝祭日に国旗を掲揚することを促す広報活動の一環である。主催者である日本会議をはじめ、大阪府神道青年会などの団体と共に、約三百名の参加者が集まった。土曜日ということもあり、御堂筋には多くの人々がおり、私たちの活動に注目が集まった。

「日の丸」は、日本の象徴であり、国家の独立と国民統合のシンボルである。私たちは、国旗を通じて国民としての誇りと統一感を高め、国際社会における日本の存在を示すことができる。このような公の行事を通じて、日本人一人一人が国旗への敬意を新たにし、その価値を再認識することが可能である。このパレードに参加することにより、日本人として、また神社界の一員として、国旗を大切にする精神をより一層深めることができた。国旗制定記念日は、私たち日本人にとって重要な日であり、これを通じて国旗への敬意を表現することは非常に意義深いことである。

「各ご家庭に祝祭日には国旗の掲揚をしましょう！」というメッセージを広めながら、より多くの人々に日本を愛し、理解してもらうことが目的である。国際化が進む現代において、私たちは再び「日本とは何か」「日本人とは何か」を考え、日本の素晴らしさを確認する機会を持つことが重要である。

国旗への敬意を表し、日本の伝統と文化を尊重する活動に加わることで私たちの一致団結した心が形成されることを切に願い、次回の国旗制定記念日やその他の国民的行事にぜひご参加いただきたい。

神社を通じて国旗への敬意を表し続け、次世代にもこの重要な価値を伝えていく責任を感じている。このようなイベントは、私たちが一つとなり日本の未来を築いていくための一歩である。

（大石神社　進藤　大長）

第三回連絡会

令和六年三月十二日(火)、午後二時十分より、生田神社会館に於いて令和五年度神道青年近畿地区連絡協議会、第三回連絡会並びに研修会が会員五十二名参会のもと開催された。

当番府県である兵庫県神道青年会の吉井副会長が開会の辞を述べられ、次に現神道青年近畿地区連絡協議会会長である野上会長、当番府県の会長である澤田会長より挨拶がされた。各挨拶共に冒頭で令和六年元日に発生した能登半島地震による被災者、被災地に向け哀悼の意と一日も早い復興を願う言葉が述べられ、会員並びに来賓併せて黙祷が行われた。

議事では、各委員会や各単位会より報告があり、滞りなく連絡会は終了し、神道青年の歌斉唱、美はしき山河斉唱、近畿地区上野相談役にあわせ聖寿万歳、当会の北川近畿地区副会長より閉会の辞が述べられ、滞りなく終了した。

研修会では『精麻の現状把握と今後の課題～私達に何ができるのか～』と題し、学校法人皇學館大學現代日本社会学部教授並び一般社団法人麻産業創造開発機構理事長、新田均先生と株式会社伊勢麻代表取締役会長、松本信吾先生を講師としてお招きして講演をいただいた。

麻の基本的な知識、伊勢麻を作る事となった経緯、麻と神社の繋がり、国産の麻を神社で使う意義、授与品として調整した麻等、神社に奉仕する人間として大変興味深い内容であった。中でも麻農家の減少に伴う生産数減少、希少性による価格高騰、伝統産業の衰退、これらの問題を解決し次代に繋ぐ活動、一人の青年神職として今何が出来るのか。これを改めて考えさせられる大変有意義な講演であった。

講演後は会場を「神仙閣」に移動し午後五時三十分より懇親会が開かれ、近畿はひとつの名のもとに集った青年神職、講師先生、参与の先輩方と各府県の情報交換をしながら交流を深めて閉会となった。

（石清水八幡宮　私市　靖）

「光舞」研修会

去る三月十三日、兵庫県神戸市に坐します生田神社において近畿地区神道青年連絡協議会研修会が開催された。

近年度々発生する自然災害。阪神淡路大震災を始め、東日本大震災、さらには令和六年元日に発生した能登半島周辺を襲った大震災。復興への祈りの機会が増える中、神道青年全国協議会では創立七十周年記念事業と

して、失われたものを受け継ぎ復興を祈る象徴となる新たな祭祀舞「光舞～ひかりのまい～」を制作した。本研修会では祭祀舞の作曲作舞に携わった小野雅楽会から会長 小野貴嗣先生と副会長 小野亮貴先生を講師にお迎えしご講演並びに舞のご指導を賜った。

光舞は、御製・御歌に綴られた復興の御心に寄せて奉奏するものとして、舞人や伶人だけでなく、祭員も唱歌に加わることを考えて制作されており、性別にも指定がないとされているので、午前の部では会員全員で舞の稽古に励むこととなった。

個人的な主観では、舞の動きだけを見るとゆったりとした動きの連続に見えがちだと感じたが、いざ舞を舞ってみると流麗な動きを再現するには種々の緩急が大事であったり、空間認識力も必要であると強く思った次第であり、稽古すればするほど奥が深いと感じる舞であった。

稽古が終盤に差し掛かると、伶人班と舞人班に分かれて練習を行い、最終的には舞と楽を合わせるところまで行うことができ、心身充実した研修となった。

近畿地区神道青年連絡協議会では、令和七年一月十七日に淡路島にて斎行予定の慰霊祭の一環で光舞を奉納する。

今回参加した会員各位は参加が叶わなかった会員に、是非とも「光舞」を伝授していただき、来年の慰霊祭では一人でも多くの会員の参加を期待したい。

（石清水八幡宮　宮田　雄生）

親睦ゴルフコンペ

去る令和六年三月二十九日に、奈良県神道青年会の担当により、神道青年近畿地区連絡協議会設立三十周年記念「親睦ゴルフコンペ」が奈良県天理市のヤマトカントリークラブに於いて開催された。総勢三十八名、当会からはＯＢ先輩、会員計五名が参加した。

当日の朝は、前夜より降り続いた雨と朝露により視界が悪く百ヤード先が見えない程の濃霧に包まれていた。各スタートホールで始球式が行われたのち順次スタートし、「さつき」・「あしび」・「さざんか」といった特徴の異なる三コースの中から各組が指定された二コースを回り、そのプレーを終始楽しんだ。早朝より発生していた濃霧も開始から一時間ほどで晴れ間が広がり始め、午後からは少し暑さを感じるほどの好天に恵まれた。大和青垣の大自然の中、雄大に広がるコースを近畿各府県の会員・ＯＢが年齢や腕前にかかわらずプレーに興じ、ゴルフを通じて親睦を深めることができた。

プレー後には、クラブハウスで懇親会と表彰式が行われた。残念ながら京都府は団体賞、個人賞ともに優勝することはできなかったが、その中でも平安神宮の南坊城卓英ＯＢ先輩が個人賞の部にて四位、またドラコン賞を二つ獲得という輝かしい成果を残された。

来年度は滋賀県神道青年会の担当にて開催される予定であり、当会からも多くの会員及びＯＢ先輩が参加されることを期待したい。

（御香宮神社　三木　善嗣）

近畿地区野球大会

令和六年五月二十九日、あじさいスタジアム北神戸に近畿各地より有志が集まり、近畿地区野球大会が開催された。今年は大雨の影響により開催が危ぶまれる中であったが運営の方々の尽力もあり、前日の悪天候が嘘であったかのような野球日和の中、優勝旗を狙って兵庫、滋賀、大阪、和歌山、京都の五府県で争われた。

第一試合、滋賀神青との初戦。初回、先発の奥村会員が相手打線を順調に抑えていくがその後四球、パスボールなどこちらのミスが重なりランナーを溜めてしまい、最後はしぶとくセンター前に運ばれ先制を許してしまう。しかしその裏、川村会員の三塁線ラインを這うかのような美しいセーフティーバントなどによりランナーを溜め、相手のエラーにも助けられながら二点を返し、すかさず逆転する。その後、奥村会員は本来の調子を取り戻し、うまく相手に打たせながら得点を許さぬピッチングを続ける。打線も爆発とはいかぬものの得点を重ね、最後は見事なピッチングを見せた奥村会

員から水無瀬会員へとつなぎ、安打を許すことなく試合を締め五対一で滋賀神青をくだした。

今年は進藤会長のくじ運も光り、初戦を勝てば次が決勝戦という組み合わせであったため、他府県の試合を見守ったのち奈良神青との決勝戦が行われた。先発は水無瀬会員。序盤は両チームとも得点圏を踏まさぬピッチングで決勝戦らしい、しびれる試合展開となった。京都神青はなかなか安打が出ない中、久野会員の粘りの打撃から見事にライト前へと運ぶ安打をきっかけにランナーを溜め、チャンスを作るが後続が続かず惜しくも得点へとつなげられない場面が続いた。好投を続ける水無瀬会員であったが、中盤、死球などによりランナーを溜めてしまい、不運なライト前へのポテンヒットにより先制を許してしまうと、その後エラーも重なり、一挙五失点を許してしまう。京都神青はその後奈良神青の好投手二枚看板の前に打線が繋がらず、そのまま〇対五で惜しくも敗れ、準優勝という結果となった。

なんとか優勝し稲本監督を胴上げすることを目標にチーム一丸となって戦ったが、最後は力及ばず来年へ向けて課題の残る悔しい結果となった大会であった。

（平安神宮　水無瀬　忠史）

中央報告

神青協「現代社会における神社の役割」を学ぶウェブ研修会

去る令和五年十一月二十七日神道青年全国協議会主催のウェブ研修会が開催され全国より約九十名を超える青年神職が参加し、当会からは三名が出席致しました。

講演では、國學院大學神道文化学部教授 黒﨑浩行先生を講師としてお迎えして行われ、第一講「災害復興と神社・祭り」、第二講「神社神道は情報技術にどう向き合うか」についてご講演いただきました。

第一講では、地域振興や文化継承の観点から神社が果たしていく役割について、今後一極集中の都市化や人口減少など生活様式が変化する中で、特に少子高齢化が進む地方では神社の維持や祭りの継承は課題となっていることなどが挙げられました。

第二講では、インターネットを活用した情報発信について、こうした変化の対応として求められている中、私たちがどのように捉えて発信していくかについて拝聴させていただき、大変充実した研修会となりました。

（平安神宮　水無瀬　忠史）

令和五年度「光舞（ひかりのまい）」講習会

令和五年十一月二十九日から三十日にかけて、神道青年全国協議会主催による「光舞」講習会が國學院大學 渋谷キャンパス 有栖川宮記念ホールにおいて行われました。講師 小野雅楽会 会長 小野 貴嗣先生、副会長 小野 亮貴先生をお迎えし、近畿地区より九名参加致しました。

この「光舞」というのは、平成三十一年、神道青年全国協議会創立七十周年の際に記念事業の一環として動き出し、東日本大震災をはじめ、阪神淡路大震災や多くの自然災害が発災し、自然の驚異に向き合いながら、共に手を取り助け合うことの大切さ、失われたものを受け継ぎ、復興を祈る象徴として新たな祭祀舞の制作に取り組まれてきました。

国民に寄り添い復興への誠を捧げてこられた上皇上皇后陛下の御製・御歌を戴き、小野雅楽会によって作曲作舞され、明日を照らす希望の舞として完成した舞です。

近畿地区連絡協議会でも令和七年一月十七日、阪神淡路大震災発災三十年の際にこの「光舞」を舞う予定にしております。神社庁、単位会事務局に「光舞」のＤＶＤと冊子が届いておりますので、目にしていただけたら幸いです。

「光舞」を奉奏することが、上皇上皇后陛下の大御心御心を伝えていく一歩になると感じています。

（御嶽教末廣教会　北川 真喜子）

中央研修会（北海道）

去る令和六年三月七日・八日の二日間にわたり、令和五年度神道青年全国協議会中央研修会が北海道札幌市にて行われ、全国各地より約三百名の青年神職が集い、京都からは三名が参加した。

本年の研修会では『未来への礎～青年神職に伝えたいこと～』を主題とした研修会であった。

第一講では作家・ジャーナリストであられる門田隆将先生より「私たちは『国家の難題』をどう考えるべきなのか」と題して、現代社会における「ステルス増税」や「ＬＧＢＴ法」の国内の問題をはじめ、国際問題についてどのように考えていかなければならないかについてご講義頂いた。これからの時代を生きてゆくものとして、時事問題にもアンテナを張り生活を送っていかなければならないと感じた。

第二講では、上川大雪酒造株式会社代表取締役社長であられる塚原敏夫先生より「共感と共創・地域連携の力で道を拓く」と題して、戦後、日本酒文化のなかった北海道に酒造会社を設立し、地域の復興に繋げられた経緯をご講義頂いた。地域を復興・活性化していく為には、その地域の強みを十分に理解し、商工会・自治会・観光協会などの諸団体の意識が一致して一つの目的に進むことが大切だと感じた。

第三講では、カーリングチーム「一般社団法人ロコソラーレ」代表理事であられる本橋真理先生より「ゼロからのチーム作り～常呂からの世界へ」と題して日本カーリング史上初のメダルを選手として獲得され、その経験を活かして現在はチームを設立しチームの運営をされている中で、世界で勝ち抜くために意識してきたご自身の経験についてご講義頂いた。アスリートのメンタルを維持するためには自分と向き合うことが大切であり、特に自分の弱みと向き合うことが大切であることが理解できた。

講義を終え、日々変化を遂げる現代社会において、今後の神社を支えて

いく青年神職として、神社を後世に繋いでいかなければいけない使命を持つなか、神社のみならず社会や地域情勢にも目をくばり、自分自身と向き合っていくことの必要性を感じた。

（石清水八幡宮　原　彰紀）

神青協創立七十五周年記念式典

神道青年全国協議会の創立七十五周年記念大会が四月二十三日に明治記念館（東京都港区）に於いて開催され、京都府より進藤会長を含め四名が参加した。

当日早朝、京都を出発した我々は新幹線に乗り、駅弁をいただきながら東京を目指した。静岡県を過ぎたころより雲行きが怪しくなり、東京へ到着した時には小雨の降る中、明治記念館に少し早く着いた我々は緑鮮やかな立派な庭園を拝見し、受付を済ませた。

式典に先立ち、午後二時より黒川光博先生（株式会社虎屋 代表取締役会長）を講師に「おいしい和菓子を喜んで召し上がって頂く」と題した講演会が行われた。室町時代後期より京都の御所で御用をお勤めになられ、明治維新と共に東京へお供（とも）された経緯を会社遍歴としてご説明頂き、黒川会長様の経営を振り返りながら「人を大切にすること」を主軸に三つの視点でご講演賜った。

視点一は「おもてなしの心」。事業が大きくなると共に業務の細分化が起こってくる。となると「和菓子に触れない社員」が増え、和菓子屋として「おもてなしの心」が育つのかと疑問を抱き、社員全員が和菓子に触れられるように職人目線での機会を作った。

視点二は「今を大切に」。老舗だからといって胡坐をかかず、時代時代にどう生き残っていくか。天明の大火にはじまり新型コロナウイルスの蔓延に至るまで何度も転機があったが、和菓子もそれぞれの時代や生活習慣に沿って変化していかなければ、おいしく召し上がっていただけない、取り残されてしまう。

視点三は「正直、謙虚、公平」。何事も包み隠さずオープンに、演題でもある「おいしい和菓子」は使命であり、「喜んで召し上がって頂く」にはいくら職人が真心こめても、売り場でぞんざいな扱いをしてはお客様には届かないことを示された。

三つの視点を理念に掲げ、会社の評価は「人」に尽きる。働いている人の

知識や人間性がわかっていただいているからこそ今日の虎屋の評価に繋がっているのではないかと分析し、和菓子を通じて創業時から変わらぬ理念「人間の基礎」を育てていくことが使命であるとして、社会変化に対する適応と経営理念の重要性を説きつつ、不易流行の実例を学ばせていただき、今回の講演を締めくくった。

午後四時より同会場にて記念式典が挙行され、鷹司尚武様（神社本庁統理）御代理、田中恆清様（神社本庁総長）、久邇朝尊様（神宮大宮司）をはじめ御来賓多数と全国より集まった青年神職との計約四百名が参集した。七十五周年の歩みを映像で振り返り、大鳥居良人会長（神道青年全国協議会）より「変貌する時局に対し、伝統をさかんにし日本祭興のため運動を展開する」と宣言され、記念式典が開式された。

御来賓を代表し、田中総長様、久邇大宮司様より「全国の神社では過疎化をはじめ様々な問題・課題が深刻化する中、青年神職としての若い力に、そして御聴許を拝した第六十三回式年遷宮、神宮奉賛への一層の尽力に期待しています」とご祝辞を頂戴した。その後、川﨑智洋副会長（神青協）より周年事業経過報告の説明を受け、記念表彰が行われ大鳥居会長より代表者に表彰状が授与され、聖寿万歳を以って式典は終了した。

七十五周年記念品
甲州印伝の小銭入れ
神青協事業委員作製、当会より
北川真喜子（監事）が出向。

その後、会場を移し午後五時三十分より記念祝賀会が打田博文様（神道政治連盟会長）のご挨拶で開宴となった。

彬子女王殿下が赤坂御苑で開催された園遊会の後に、記念祝賀会より御台臨された。殿下より「思いを新たに神道の伝統と歴史を紡ぎ続けてくださいますことを祈ります。コミュニケーションを取られながら連携を図られると、全国の神社は大いに発展していくことでしょう」との御言葉を賜った。殿下を中心として大鳥居会長、来賓の皆様で神宮御料酒の「白鷹」で鏡開き（三樽）を行い、七十五周年の門出を御祝した。祝宴でのお料理は、能登半島地震で被害を受けられた石川県の再興を願って、北陸産の食材がふんだんに使われた和食が供され、我々は美味に舌鼓を打った。畿内はもちろんのことだが、他都道県の神職の方々と青年会活動について交流が出来たことは、大変に意義のあるものであった。東北の美味しいお酒も進み賑々しく催されたこの宴は、小林慶直様（神道青年全国協議会令和三、四年度会長）の手締めで創立七十五周年記念大会は幕を閉じた。

多様性を求められる現代において、主題であった「起点」を忘れずに、日常に戻りつつある中で我々は、どうしたら神様は喜んでくださるか、何を伝えていくべきか、変えていくもの、変えてはいけないものを再考させられる一日となった。

（長岡天満宮　有持　圭祐）

神青協定例総会

令和六年四月二十四日(水)神社本庁大講堂に於いて「神道青年全国協議会　第七十五回定例総会」が開催された。

当日は大鳥居会長他神青協役員を始め全国より多くの同志が集い、開会式では神社本庁総長 田中恆清様のご臨席をいただき、粛々と執り行われた。

続く定例表彰式では、全国より多くの事業がエントリーされ当会は「教化委員会　七五三の集い」をエントリーしたが残念ながら表彰には至らなかった。全国の受賞された事業を参考に、今後当会に於いても唯一無二の事業を展開できるよう検討を進めていきたい。

また本総会では「神宮式年遷宮の〝こころ〟を守り伝へる委員会」が設置され、来る令和十五年第六十三回神宮式年遷宮に向け、思いを新たに何かできることを模索する良き機会となった。

さらに総会後北陸地区より本年一月一日に発災した能登半島地震の被害状況についての報告会が行われ、テレビや新聞等で報道される機会が少なくなってきているが、現状現地では限られた活動しかできず、まだまだ手が届かない事が多々あると拝聴し、今後京都府神道青年会として現地に入り復興活動ができる日が来るまで、被災地を忘れることなく日々の神明奉仕に努めようと強く感じた日となった。

（八坂神社　東條　貴史）

編集後記

ここに『山紫水明』一四七号を発行させていただくこととなりました。発行にあたっては毎号多くの方のご協力をいただいております。厚くお礼申し上げます。

巻頭には進藤会長の「ご挨拶」を掲載しております。課題は多くありますが、我々は「青年神職らしく」現実の課題に立ち向かい、「揺るぎない奉仕の精神を繋ぎ全う」する。会長の言葉を受けて、改めて我々青年神職らしく奮戦していかねばと感じました。

本号作成にあたり、今回も数多くの会員の皆様に執筆を頂きました。各委員会の充実した活動内容をお送りいただくごとに、我々広報委員会も負けていられないなと思う今日この頃です。

（広報委員会）

事業頒布品お申し込み先変更のお知らせ

この度、京都府神道青年会での近畿地区事業頒布品の郵送での注文先を左記に変更いたしました。ご迷惑をおかけいたしますが、何卒宜しくお願いいたします。

近畿事業委員京都府担当
氏　名　北村　友湖
役　職　権禰宜
奉職先　白峯神宮
住　所　〒六〇二―〇〇五四　京都市上京区今出川通堀川東入飛鳥井町二六一
電　話　〇七五―四四一―三八一〇

ファックスでのご注文・お問い合わせ先は左記で変更ございません。
番　号　〇五〇―三三八三―一三一九

『山紫水明』第147号
題　字　頼新先生
編　集　広報委員会
発行所　京都府神道青年会
発行日　令和６年６月30日
印　刷　株式会社ユニティー

京都府神道青年会
当会の活動はURLまたはQRを読み取ってウェブサイト、SNSにアクセスしてご確認いただけます。
https://kyoto-yashiro.jp